

「未来の担い手育成プログラム研究指定校」事業報告書（2年次）

1 学校名等

学 校 名	京丹後市立丹後中学校				校長名	藤原 英一
研 究 主 題	「課題解決型の学習」をとおして、生徒の自己肯定感を高め、目的意識を持ち、未来を拓く力をつける。					
研究の目的	よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、予測困難な時代に対応することができる「未来の担い手の育成」のための教育活動の充実を図る。					
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	1	2	2	1	6	20
生 徒 数	28	44	37	6	115	

2 研究校の概要（生徒の実態、学力状況（分析）、研究体制等）

(1) 生徒の実態

1年次と同様に、与えられた課題に素直に取り組める良さがあるが、自己肯定感の低さから、意欲や粘り強さについて弱さがあり、自分らしさが見えない生徒は少なくない。受け身な態度から脱却し、主体的に課題に向き合い、目的意識を持たせ、自分の力を発揮できる環境（PBLをとおした学習環境）の中で、やればできるという実感とともに、「正解のない課題」の最適解に向かう思考力・判断力を身に付けさせたい。また、1年次の課題として見受けられた「発信力・表現力」の育成が不可欠である。本研究をとおして、他者（友・大人・企業等）と協力し、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、予測困難な時代に対応することができる未来の担い手の育成のため、教育活動を充実させていきたい。

(2) 研究体制等

ア 体制

校長 — 教頭 — 研究主任（教務主任） — 学年主任 — 各学年担任・副担任

イ 役割

- ・校長…研究推進統括、指導助言
- ・教頭…研究推進管理、運営責任者
- ・教務主任、研究主任…基本方針の推進、企画、実践の中核
- ・担任、副担任…生徒指導、授業実践

3 主な研究活動（時期や内容等）

(1) 教員の研修

ア 1学期

- ・PBL課題解決型の学習講座（センター研修）への参加及び校内研修での伝達講習

イ 2学期

- ・課題解決型の学習に向けての具体的構想（総合的な学習の時間を中心に各教科への波及）

(2) 生徒の活動

時期	活動内容
6月	PBLオリエンテーション（課題意識をもたせる）
9月	<p>①丹後王国ブルワリー訪問 「丹後王国中川社長の講話」及び 「観光・農業・海の専門家からの講話」</p>  <p>※施設見学及び講話にて設定された問いに対するアプローチのヒントを得た。</p> <p>②総合的な学習の時間にて情報収集及び課題分析</p>
10月	<p>①総合的な学習の時間にて課題分析</p> <p>②丹後王国にて職場体験及び仮説構築</p>  <p>※職場体験をとおして丹後王国を学び、実体験を生かした仮説構築へつなげた。</p> <p>③課題設定に即した地域で活躍されている方々の講話（龍宮プロジェクト等）</p> <p>④海岸清掃活動（拾ってつなぐ丹後の海） ※丹後の海の状況を知り、ボランティア活動をとおして課題を見出した。</p> <p>⑤総合的な学習の時間にて発表準備</p>
11月	<p>中間発表</p> <p>※学習発表会に向けた中間発表とし、丹後王国中川社長、キャリア教育コーディネーターから改善の視点をいただき、再調整する機会となった。</p>
12月	<p>①学習発表会（PBL校内選考会を兼ねる）</p>  <p>※丹後王国中川社長、丹後教育局及び京丹後市教育委員会指導主事からアドバイスをいただいて改善の方策を図った。</p> <p>※審査員のご意見をもとに校内12グループの中から3グループに絞り込み、最終的に校内でコンテストに出場する1グループを決定した。</p>
1月	きょうと明日へのチャレンジコンテスト参加に向けた最終調整
2月	<p>きょうと明日へのチャレンジコンテスト参加</p> <p>※今年度のPBLのまとめとして府内各校と共にコンテストに参加し発表した。</p> <p>※他校との交流の中で視野を広げると共に、探究活動の振り返りを行った。</p> 

4 今年度の研究の成果と検証（生徒、教職員、学校、家庭・地域社会の変容等）

(1) 教職員

ア PBL課題解決型の学習講座（センター研修）に参加し学びを深めるとともに、受講者が校内研修で伝達講習を行い、「未来の担い手育成プログラム」のねらいやPBLについての共通認識をもち、今後の研究イメージを教職員全体で共有することができた。

イ 1年次の経験をふまえ、本校の総合的な学習の時間の年間計画を研究のねらいに即した計画に再調整し、効果的な指導の流れを構築しながら1年次の成果をもとに2年次（今年度）へとつなぐことができた。

ウ 総合的な学習の時間だけではなく、課題解決型の学習を教科指導の中に可能な範囲で取り入れ、授業改善の視点をもつことができた。生徒の対話を中心に授業展開しながら学びを深める授業が増えた。

(2) 生徒

ア 丹後王国ブルワリー中川社長のご支援により、丹後地域でご活躍されている各分野の専門の方々からの講話を受け、活動されている方々の思いを知ることで、探究活動の課題提起とすることができた。

イ 課題の設定、情報収集、仮説の構築、プレゼンテーション資料の作成など、生徒が主体となり、グループで協力して取り組むことにより、コミュニケーション能力の育成につながっている。

ウ 1年次はインターネット等での情報収集が根拠の中心となっていたが、今年度は地域の方々の講話からの学び、事業所へ直接リサーチをかけるなど、より地域に密着した情報を収集することができ、その根拠をもとに提言へとつなげることができた。

(3) 家庭・地域社会の変容

ア 丹後町で活躍されている方々を講師としてお招きし、丹後の活性化に対する思いや取組について講話をいただいた。生徒の意識の変容はもとより、地域社会と生徒が同じ課題意識を共有する機会となった。

イ 学習発表会等に参観に来ていただいた方には、中学生が地域に対してどのようなことを課題として考え、どのようにアプローチしようとしているのかを理解していただく機会となった。講師としてお世話になった方々はもとより、学校運営協議会等にも広く周知し、中学生の活動を見ていただくことができた。

5 今年度の課題

(1) 教職員

ア 研究の中心となる第2学年については、計画・取組の過程の中でPDCAサイクルをもとに充実したものとなったが、他学年への波及については1年次に引き続き弱さが残った。

イ 2年次はPBLの取組を「総合的な学習の時間」を中心として展開しながら、授業改善の視点をもち教科指導での工夫・改善をねらいとしたが、最終年度ではさらに意識を高め、改善を進めていく必要がある。

(2) 生徒

ア 探究活動をとおして一定の力を身に付けてきているが、どのように相手に伝えるのか、どうすれば相手に伝わるのかなどの発信力・表現力には1年次と同様に課題が残った。この課

題は本研究の中だけで見出されたものではなく、本校の継続した課題である。教科・領域やあらゆる活動の中で高めていく工夫が必要である。

イ 成果に挙げたように、地域密着型の情報収集を行うことで、地域の方々の思いや願いを知り、中学生としてどのような行動を起こすことができるのか等、提言はもとより行動に移していくことができる主体性を育て、発信力・行動力につなげていく必要がある。

6 来年度の研究構想

- (1) 2年間の経験を活かし、1学期の早い段階から取組を開始することで、2学期の探究的な学習にゆとりをもたせ、生徒の想像力や企画力を発揮しやすい計画に改善していく。
- (2) 生徒の課題（弱さ）である発信力・表現力については、認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ視点から、その課題を全教職員で共有し、総合的な学習の時間はもとより、あらゆる教科・領域においてあらゆる機会を設定していく。
- (3) 今年度の研究の主体となった2年生については、PBLの経験をとおして身に付いた学習意欲やスキルが醸成されてきていることをふまえ、本学年（新3年生）を突破口としてPBLの手法を生かした授業改善を継続していく。
また、最終年度は3年生から2年生へPBLのアドバイスを伝える機会を設定し、生徒同士の学びを深め合う環境づくりを行う。
- (4) 非認知能力については、保幼小中一貫教育（学園）の強みを活かし、本研究のねらいを学園に周知しながら、系統的にはぐくんでいく。
- (5) 地域への発信をより積極的に行い、地域の協力を得ることにより、生徒の探究的な学習が今年度以上に円滑に進むよう環境づくりに努める。地域とともにある学校づくり、地域とともに進める地域活性化をPBLをとおして推進していく。